

後期江戸語における行為要求表現の諸相

福島 直恭

1. 本研究の目的と行為要求表現について

1-1. 本研究の目的

本研究の主要な目的は、江戸語の行為要求表現には、どのような表現形式が存在し、それら同士がどのような関係にあったのか、そしてその関係は、時間の経過とともにどのように推移していったのかを、洒落本、滑稽本、人情本などの調査を基にして、できるだけ明らかにすることである。ただし、本稿の筆者としては、稿を改めて、江戸語の「～なさい」「～下さい」「～っしょい」など、「～い」という形態を持つ、行為要求表現に関わる言語形式が、このような形で定着するプロセスを説明してみたいとも考えている。そのためには、これらの表現形式とこれら以外の行為要求表現形式との関係を把握しておく必要があるであろう。本稿にはそういう研究の予備的段階という面もあるので、例えば「～なさい」「～なされ」「～なさいませ」「～なさりませ」「～なされませ」など、従来の多くの研究では、その違いを重視されずにまとめて扱われてきたような表現形式の違いの記述にも多くのスペースを割くものになっている。

1-2. 本研究における「行為要求表現」の範囲

本研究で考察対象とする「行為要求表現」とは、発話者の発話によって、聞き手が何らかの行為をする、あるいはすることを思いとどまることを発話者が期待して発話する言語表現のことである。より具体的に言えば、従来「命令表現」「依頼表現」「禁止表現」と呼ばれていたものに加えて、現代語で言えば「～したほうがいい」とか「～するべきだ」というような「忠告表現」「当為表現」や、(私と一緒に)「～しようよ」とか「～しない?」というような「誘いかけ表現」も含むものである。また、「禁止表現」を、「否定の命令表現」と狭くとらえるなら、その他に「～しないように依頼する表現」「～しない方がいいと忠告する表現」「私もしないからあなたも～しないようにしようよ」というような否定の誘いかけ表現も行為要求表現といえそうだが、本研究ではそれら広い意味での「禁止表現」は紙幅の制約があるためすべて割愛せざるを得なかった。

1-3. 先行研究

江戸語の行為要求表現の使用の実態を明らかにするという目的の本稿と部分的に重なるような観点からの先行研究は、すでにいくつも存在することは確かである。例えば田中（1957）では命令表現に関しての、工藤（1979）では依頼表現に関しての、江戸～近代東京語までのさまざまな表現形式についての記述が試みられている。また森（2010）では歴史記述に語用論的観点を導入して、尊敬語命令形（ex「なされ」）と受益表現命令形（ex「くだされ」）の変遷においての関わり合いを説明している。しかし、それらの多くは、例えば「～なさい」という言語形式での命令表現と「～なせえ」という言語形式での命令表現はどのように違うのかとか、「～くださいませ」という言語形式での依頼表現と「～くださりませ」という言語形式での依頼表現はどのように違うのかなどに関しての考察は十分には行われていない。本研究ではそのような、変異形のレベルの使い分けに関しても重視していこうと思う。

行為要求の分類に関する先行研究で重要なものとしては、まず姫野(1991)があげられる。詳しい紹介は割愛するが、この論文ではその行為による受益者は話し手が聞き手か、その行為をするかしないかの決定権は話し手が持つか聞き手が持つかという基準から、行為要求的な行為を命令的指示、恩恵的指示、依頼、勧めの4つに分類して、これらの言語行為にかかわる表現形式がどの部分をカバーするものなのかを検討している。また、沖(1995)では、依頼表現には要求的依頼の他に勧めの依頼があることを指摘している。これらの知見は、特に現代語の分析などには有効だと思うし、先に挙げた森(2010)は姫野(1991)この分類を基準としてこれまでにない歴史的記述を行っている。しかし、本稿で重視する変異形間の違いの説明にはこれらの分類はそれほどの効果をもたらさないようである。よって本稿では、基本的に行為要求という行為の分類とか行為要求表現の機能の分類を基準とするのではなく、表現形式の違いをもとにした記述を展開していく。

2. 江戸語の行為要求表現の分類と具体例

ここでは、本研究で行為要求表現と呼ぶ言語形式（禁止以外）の中の主なものを用例を添えて列挙する³¹。ただし、hグループ「誘いかけ」は言語形式ではなく機能による分類となっている。さらに最後のiグループは、行為要求表現の専用形式とはいいいくような表現群をまとめたもので、形式上の分類とも機能からの分類ともいえないものになっている。それらは本研究の目的からみていわば周辺的な存在であり、それらだけが形式上の分類となっていないことが大きな問題にはならないと考える。

〈江戸語の主な行為要求表現（「禁止」は除く）

- a. 「(本動詞・補助動詞) なさる」の命令形「なされ」、およびその派生形式「なさい」「なせえ」、さらにそれらに助動詞「ませ」「まし」がついたもの（それらに終助詞が

ついたものも含む・b以下も同じ)。以下ではこのグループを「なさい系」と呼ぶ。

- (1) 気の薬だから聞きなさい。『浮世風呂』(隠居→一同)
 - (2) おいらが様な者も食つてみなせえ『繁千話』(馬骨→空琴)
 - (3) 一服まずはあがりなさりませ『遊子方言』(山本屋亭主→通者・むすこ)
- b. (本動詞・補助動詞) 連用形+「な」、およびその「な」に「よ(あるいは「や」)がついた「なよ(や)」の派生形式と思われる「ねえ」。なお、『江戸語大辞典』(前田勇編・講談社)の「ねえ」の項には、「尊敬の助動詞『なる』の命令形『なれ』の訛『ない』の再訛」という説明がある。どちらにしても、「な」と「ねえ」は、形態的には「なさい」と「なせえ」のように連接母音aiと長母音e:で対立しているわけではないが、表現価値という点では、連接母音形式と長母音形式の対立と類似的な対立関係を形成していたと考えられる。
- (4) ちよつと咄して聞かせな『傾城買四十八手』(むすこ→女郎)
 - (5) これこれちつと起きねえ『甲斐新話』(谷粋→綱木)
- c. (本動詞・補助動詞) 未然形+「す・さす」+「やれ」からできたと思われる「っしやれ」「さっしやれ」「っしやい」「さっしやい」、および「っしやい」「さっしやい」の派生形式「っせえ」「さっせえ」。以下では「っしやい系」と呼ぶ。
- (6) 店の客を見さっしやい『遊子方言』(通者→むすこ)
 - (7) 支度をさっせへよ『浮世風呂』(辰→下女)
- d. 「(本動詞・補助動詞) くださる」の命令形「くだされ」、およびその派生形式「ください」「くだせえ」、さらにそれらに助動詞「ませ(まし)」がついたもの。以下では「ください系」と呼ぶ。
- (8) どうぞ堪忍してございませ『春色梅児誉美』(お長→捕手)
- e. 動詞命令形・補助動詞命令形・助動詞命令形での言い切り。ただし、本研究の目的に合わせて、「なされ」「下され」「っしやれ・さっしやれ」は、このeには入れずに、それぞれの派生形式と同じグループ(a,c,d)に入れた。なお、例えば「ご覧じませ」などの「まし」は、命令形「ませ」の派生形式として扱い、「ませ」と同様にこのグループに含める。
- (9) 早くおちやうちんをつけろ。『遊子方言』(茶屋女房→茶屋店員)
 - (10) お汁でもかへてあげろよ。『甲斐新話』(平兵衛→はるの)
- f. 動詞連用形+終助詞「や」
- (11) 呼びにやりや『南江駅話』(宗→なか)
- なお、例えば「飲めや」とか「〜てくれや」のように、命令形に「や」がついた形での行為要求表現もみられたが、これらは「や」がなくても行為要求表現なので、そういう例はeグループの命令形の用例としてここには入れていない。
- g. 「お」+本動詞連用形、動詞+「て」+「お」+補助動詞連用形^{註2}
- (12) ちつとついでおくれ『春色梅児誉美』(お長→米八)

h. 誘いかけ

発話者が聞き手に「(一緒に)~しよう」と働きかける行為を本研究では「誘いかけ」と呼び、これも行為要求表現のひとつと位置づけた。(13)のように助動詞の「う・よう」を使用したものが大半である(「~べし」という誘いかけも少数だがある)。

(13) サアサア飲もふ飲もふ『春色辰巳園』(増吉→仇吉)

i. その他。

このグループは、その表現の仕方が必ずしも行為要求の専用形式とはいえないと考えられるものなどをまとめた。例えば次の例文(14)のように、現代語でいえば「~することがよい」とか「~しないことが悪い」という意味の発話をすることによって、~させようとするものや、(15)のように、「~たい」「~てもらいたい」という形や「願う」とか「おがむ」などの動詞によって話し手の願望を表明することによって、その願望を叶えるための行為を聞き手に間接的に要求するもの、さらに、(16)のように疑問文(否定疑問文が多い)を用いて実質的に依頼行為を行っているもの、(17)のように行為を要求する直接的な言語表現形式部分を顕現させないような表現などがある。

(14) 言はれねへよふにしやあがつたがゑへは『甲駅新話』(谷粹→綱木)

(15) 鼻をかんで歯をみがいてもらいたいよ『浮世風呂』(店助→ぶた七)

(16) お茶をあげねへか『春色梅兎誉美』(蔭八→お民)

(17) チトモシお話しに。(「来て下さい」のような部分が顕現していない)

『浮世風呂』(きじ→いぬ)

これらは前後の文脈から考えて、明らかに行為を要求していることは、聞き手にも読者にも理解できるが、それがどの程度の強制力を持った行為要求なのか、聞き手に選択の余地がどの程度与えられているといえるのかという解釈に関しては、他の専用形式による行為要求に比べて、一律には確定しにくいといわなければならない。本来的に状況の違いや個人の受け取り方の違いによって、それがそもそも「聞き手に何らかの行為を要求しているのかどうか」ということも含めて、解釈に幅の生じる表現方法であるということである。このiグループにまとめたような行為要求表現は本研究での考察対象の中心とはしない。その他、遊女専用の行為要求表現形式と思われるものも、ここでは挙げていない。以上のように、本研究の筆者が行為要求表現と認めたものを、具体例を示しながら分類してきたが、次節以降では、洒落本、滑稽本、人情本に現れるこれらの行為要求表現について、より詳細にみていくことにする。

3. 洒落本にみられる行為要求表現

3-1. 調査対象とした洒落本

今回調査対象とした洒落本は、江戸の口頭言語を比較的よく反映していると思われる、

会話主体のもので、具体的には以下の8本である。

『遊子方言』1770年刊 『南江駅話』1770年刊 『俠者方言』1771刊
 『南閩雑話』1773年刊 『甲駅新話』1775年刊 『傾城買四十八手』1790年刊
 『繁千話』1790年刊 『傾城買二筋道』1798年刊

どの作品に関しても、用例の採取は会話部分だけからおこなった。

3-2. 洒落本に現れた行為要求表現の概要

調査対象とした8本の洒落本のうち『俠者方言』以外の7作は、主として江戸の遊郭や岡場所の遊女やその他の妓楼の関係者、船宿や茶屋の関係者、客などが登場人物であり、発話量としては、そのうちの遊女と客がもっとも多くなっている。しかし、すでに多くの先行研究で指摘されているように^{註3}、遊女の使用する言語は、江戸庶民の典型的な口頭言語とは異なる部分が多い。行為要求表現に関する筆者の調査でも、遊女の使用する

〈表1〉洒落本の行為要求表現（禁止以外）の出現数

	行為要求表現の種類	男性	女性	計
a	～なさい	2	0	2
	～なせえ	16	1	17
	～なさりませ	1	0	1
	～なさりまし	6	12	18
	～なされませ	4	1	5
	～なされまし	0	1	1
	～なせんし	6	1	7
	～なせへし	1	0	1
	～なんし	6	3	9
	～なんせ	1	1	2
b	～な	13	2	15
	～ねえ	11	0	11
c	～っしやれ	1	0	1
	～っしやい	7	0	7
	～っせえ	0	5	5
d	～ください	2	2	4
	～くだせえ	0	1	1
	～くだされませ	3	1	4
	～くださりまし	1	1	2
e	動詞命令形	14	2	16
	補助動詞助動詞命令形	70	8	78
f	～や	22	2	24
g	お+動詞連用形	3	0	3
h	誘いかけ	14	0	14
i	～がいい	8	0	8
	～たい	6	0	6
	動詞「頼む」「願う」	6	0	6
	疑問文	13	2	15
	非顕現	22	1	23
	合計	259	47	306

表現とそれ以外の登場人物が使用する表現とでは大きな違いが認められた。そこで本稿では遊女以外の登場人物の発話を主な分析対象とすることにした。本研究で用いる他の言語資料、滑稽本や人情本などに登場する江戸の一般の人々の発話から得たデータと並べたり比較したりし得るのは、こちらの方だと考えるからである。次の〈表1〉は、今回調査した洒落本8作品にみられた「禁止」以外の行為要求表現を、8作品分すべてまとめて、表現形式ごとに出現数を示したものである。

〈表1〉は、行為要求表現の種類ごとに、その出現数を示しているが、類似のものをまとめて一番左の縦の欄のようにa～iの9つのグループになっている。これが第2節で説明したa～iと対応するものである。今回の洒落本の調査では、遊女以外の発話者による行為要求表現は、男性話者によるもの259例、女性話者によるもの47例、合計306例認められた。男性話者の数値が大きいのは、先に述べたように、洒落本において、女性話者の多くを占める遊女の発話を、すべてこの表から除いたためである。もし遊女の行為要求表現を加えたら、女性の方が男性より少し多くなる。

次に、これらの調査結果の概要をもとに、表現形式ごとにさらに詳しくみていく。

3-3. 洒落本の行為要求表現形式別の調査結果（遊女以外）

3-3-1. 「なさい系」による行為要求表現

本動詞「なさい」「なせえ」、補助動詞「～なさい」「～なせえ」およびそれらに助動詞「ませ」「まし」がついた行為要求表現は、合わせて63例現れた。行為要求の中でも強制力を持ち、相手にその要求に従うかどうかという選択の余地を与えようとしないうわゆる「命令表現」（姫野（1991）の分類でいえば命令的指示と恩恵的指示）といえそうなものは、〈表1〉でいえば、このaグループのほかにはb、c、e、f、gがそれに該当すると思われるが、それらの出現数の合計は223例なので、そのうちの30%程度がこの「なさい」型による行為要求表現ということになる^{註4}。

本研究では、同じ「なさい系（=aグループ）」でも、例えば「～なさい」と「～なせえ」ではどう違うかというような、このグループ内の各言語形式間の違いを見いだすことも重視する。「なさい系」で実際に洒落本に現れた言語形式のうち、その後の時代も使われ続け、現代語の命令表現でも主要なポジションを占めているのは「～なさい」である。この「～なさい」が「～なせえ」とどのような関係にあったのか、また「～なさい」がそれに助動詞「ませ（まし）」がついた形式とどのような関係にあったのかについてみていくことにする。まず、「ませ」がつかない形だけに絞ると、「～なさい」が2例、「～なせえ」が17例現れた。どちらもすべて補助動詞で、「～なさい」も「～なせえ」も動詞連用形に接続する形や「～てくんなさい」「～てみなせえ」などの形で現れた。「～なさい」は2例とも『遊子方言』の男性客が遊女や茶屋の女房に対して使っていて、この作品には「～なせえ」の形は現れない。これに対して「～なせえ」は、調査した8本

のうち5本の作品に現れ使用数も多いので、洒落本に登場するような階層の人々にとっては、男女を問わずこちらの方がよく使う形だったのかもしれない。男性の話者が自分と同じか目下の話者に対して使う場合が多いが^{註5}、目上に対して使用する例や、女性話者の使用例もあり、「なさい」と「なせえ」の違いに関しては、用例が少ないこともあってこれ以上詳しいことは今回の洒落本の調査結果からはいえない。

「なさい」「なせえ」と、それらに「ませ(まし)」がついた形との違いは、かなり明瞭である。「ませ」がついた形で現れたのが47例、つかない形で現れたのが19例あったが、男性話者でも女性話者でも、目上に対する発話の場合は「ませ」がついた形での行為要求、同等か目下の聞き手に対する発話では「ませ」がつかない形での行為要求が主体であった。「なさり～」と「なされ～」はどう違うのかとか「～ませ」と「～まし」は何が違うのかということも本研究の筆者としては興味深いのが、紙幅の制約もあり本稿では言及できない。

3-3-2. 「～な」「～ねえ」による行為要求表現

おそらく「なさい型」からの派生だと思われる「な」、およびそれに終助詞「よ（あるいは「や）」がついた「なよ(や)」が「ない」→「ねえ」という道筋で派生したと思われる「ねえ」は、ともに洒落本の中に10例以上の使用が認められた。「な」の方は、発話者の性別を問わないが、「ねえ」の方は洒落本では女性の使用例が見られなかった。

3-3-3. 「～っしゃい系」による行為要求表現

動詞未然形に助動詞「す・さす」の連用形がつき、それに助動詞「やれ」がついてきたと思われる「っしゃれ・さっしゃれ」からの派生形「～っしゃい・～さっしゃい」とその異形態である長母音形式の「～っせえ・～さっせえ」は、「～っしゃい（「～さっしゃい」も含む・以下同様）が7例、「～っしゃれ」が1例、「～っせえ」が5例現れた。「～っしゃい」「～さっしゃれ」の発話者はすべて男性、「～っせえ」はすべて女性だが、用例数が少ないので「～っしゃい」や「～っせへ」が性別に結びついた言語形式だったと断定することはできない。「洒落本」8作品の調査からは、この「～っしゃい」に「ませ」が後接した言語形式の使用例がみられなかった。「なさい」「下さい」は、そういう形での言い切りによる行為要求表現のほかに、それらに「ませ(まし)」が後接した形の行為要求表現もみられ、聞き手が目上の場合には「ませ(まし)」のついた形がもっぱら使われていたが、「～っしゃい」「～っせへ」の方は、「～っしゃいませ(まし)」とか「～っせへませ(まし)」という形が現れず、目上に対する発話（茶屋の後家→客）にも（18）のように「ませ」のつかない「～っせへ」が使われていた。

（18）飯を食はつせへ『甲斐新話』（後家→谷粋、金）

3-3-4. 「ください系」による行為要求表現

〈表1〉のdグループは、「くださりませ」からの派生形式「くださいませ」、及びその「ませ(まし)」の脱落した「ください」、さらに「くださいkudasai」の語末の接続母音aiが

長母音化してe:となった「くだせえ」などをまとめたものである。

洒落本の調査では、『遊子方言』『甲駅新話』『南閨雑話』に合わせて11例が現れた。言いきりの場合は「ください」も「くだせえ」も現れたが、「ませ(まし)」が後接する形としては「くださいませ(まし)」の方しか現れず、長母音形式「くだせえ」+「ませ(まし)」が見られないという点で「なさい」のグループと共通している。「ください」「くだせえ」の方は同等か目下の聞き手に対する発話、「ませ(まし)」が後接する方はすべて目上の聞き手に対する発話に現れていて、この点でも「なさい系」と似た分布を示す。

3-3-5. 命令形による行為要求表現

次に、前節の分類でいえばグループeにあたる、動詞、補助動詞、助動詞の命令形を使用した行為要求表現について説明していく。命令形を使った行為要求表現は、調査した8作品すべてに現れ、総数は94例、行為要求表現全306例の中で占める割合は約31%である。行為要求の中での、狭い意味での「命令表現」と言えそうな223例の中だけでみると、そのうちの40%以上がこの命令形による行為要求表現ということになる。

動詞の命令形が16例で、補助動詞や助動詞の命令形による行為要求表現が78例であった。このうち、助動詞「ます」や補助動詞「やる」「給ふ」「候ふ」の命令形によるものは、それ以外の命令形による行為要求表現と比べると、聞き手に対する丁寧さとか配慮という点で違いがあると思われる。男性話者には「ませ」「やれ」「給へ」「候へ」という表現(26例)も、それ以外の命令形による表現(44例)も両方使用されているのに対して、女性話者の使用は「ませ」(6例)と「やれ」(2例)に限られていた。

命令形による行為要求表現は、目上に対する使用がほとんど見られない^{註6}。『南江駅話』に助動詞「ませ」を使用した目上の聞き手に対する行為要求表現が2例あるが、これは命令形とはいっても「召しませ」「あそばされませ」という大変丁寧な表現として表れるものである。それ以外の命令形による行為要求表現は「ませ」「たまへ」など丁寧や尊敬を含意している言語形式であったとしても、基本的には同等とか目下の聞き手に対ししか使えなかったものと考えられる。

3-3-6. 「連用形+や」による行為要求表現

「動詞・補助動詞の連用形+や」の形での行為要求表現は、調査した8作品のうち6作品にみられ、合計の用例数は23である。すべて同等か目下の聞き手に対する発話に現れていて、男性話者によるものが22例、女性話者によるものが2例であった。

3-3-7. 「お+動詞連用形」による行為要求表現

〈表1〉のgの欄は、例えば「～をお飲み」のような「お+本動詞連用形」と、「～を飲んでおくれ」のような「動詞+て+お+補助動詞連用形」による行為要求表現がはいる。ただし、今回の洒落本の調査結果からは「お+本動詞連用形」という形しか現れず、それも2つの作品で計3回しかなかった。使用者は3例とも男性話者である。このタイプの行為要求表現の出現数が少ないことと、女性の使用者がみられない点は、滑稽本や人

情本の調査結果と大きく違う点である。

3-3-8. 「誘いかけ」という行為要求表現

話し手が聞き手に対して、「(自分と一緒に) ~をしよう」と誘いかけるタイプの行為要求表現は、今回調査した洒落本には5作品に合計14回現れた。「動詞+う」とか、「動詞+ましょう」など助動詞「う」によるものがほとんどで、「べし」を用いたものが2例だけあった。使用者は男性話者ばかりだが、男性専用の行為要求表現方法だったとは思えない。〈表1〉の女性話者の多くを占める遊女屋や茶屋のおかみの発話の中に、客や亭主や店員や遊女などに対して「自分と一緒に~しよう」と誘いかけるような状況が現れにくかったことが原因だと考えておく。本稿では詳しく言及できないが、遊女の言語使用の中にはこのタイプの行為要求表現も現れる。

3-3-9. その他の行為要求表現

この「その他」の行為要求表現の中で最も多く現れたのは「さあさあ、お早く」のように直接的に行為を要求する言語形式を顕現させず、その部分を相手に押し量らせるような表現で23例現れた。次が現代語で言えば「コラッ、早く行かないか」、「なぜ行かないんだ」のような形式上の疑問文を使用した行為要求の例で15例、「~することが良い」とか「~しないことが悪い」という自分の評価を表明することによって、間接的に聞き手に~させようとしていると判断できる例が8例みられた。これらはいずれも間接的な行為要求表現と言えそうだが、それぞれの使用数はかなりの数である。しかしこのような表現は、文献上で確認できるかどうかはともかく、いつの時代にも、どの地域の方言にもあり得るはずである。多くの先行研究ではこのような表現は命令とか依頼表現から除外しているが、本稿では、ある程度の比率でこのような表現をいつも使用していることを確認するために、除外せずに表の中にもいれておく。

4. 滑稽本にみられる行為要求表現

4-1. 『浮世風呂』に現れた行為要求表現の概要

本節では、式亭三馬作の滑稽本『浮世風呂』(1809～1813年刊)に現れた行為要求表現について考察する。3-2の洒落本の調査結果と同様の分類をしてそれぞれの出現数を示したのが次の〈表2〉である。『浮世風呂』には洒落本の遊女と類似的な職を持つ女性も風呂屋の客として多数登場するが、彼女たちが風呂屋で使用する言語は、他の客達との著しい違いが見られないので、ここではすべての女性話者をまとめて扱っている。この点は次節の人情本の調査においても同様である。

『浮世風呂』の中では、男性話者によるものが192例、女性話者によるものが239例、合計431例の行為要求表現がみられた。また次の(19)のような「~っし」や(20)のようなタ形やタリ形を使った洒落本ではみられなかったタイプの行為要求表現がみられた。「~っ

〈表2〉『浮世風呂』の行為要求表現（禁止以外）の出現数

	行為要求表現の種類	男性	女性	計
a	～なさい	19	0	19
	～なされ	2	0	2
	～なせえ	16	34	50
	～なさいまし	3	17	20
	～なさりませ	0	1	1
b	～な	16	29	45
	～ねえ	21	3	24
c	～っしゃい	2	1	3
	～っせえ	1	2	3
	～っし	16	1	17
d	～下さりませ	1	2	3
e	動詞命令形	14	1	15
	補助動詞助動詞命令形	34	25	59
f	～や	6	5	11
g	お+動詞連用形	6	64	70
h	誘いかけ	6	23	29
i	～がいい	14	13	27
	～たい	1	1	2
	～たり・～た	4	2	6
	動詞「頼む」	0	1	1
	疑問文	7	8	15
	非顕現	3	6	9
	合計	192	239	431

し」の方は「～っしゃい」からの派生だと考えてcグループにいれ、タヤタリの方は、これらの助動詞が基本的機能として行為要求を表すものではないのでiのグループにいれた。

(19) うつつやつておかつし『浮世風呂巻一』（鉄炮作→飛八）

(20) さあさあ けへつたけへつた『浮世風呂巻一』（太吉の母→太吉）

4-2. 『浮世風呂』の行為要求表現形式別の調査結果

4-2-1. 「なさい系」による行為要求表現

「～なさい」「～なせえ」「～なさいまし」等を使った行為要求表現は、合わせて92例現れた。洒落本では、女性の発話自体が少ないとはいえ、丁寧の「まし」が付かない「なさい」「なせえ」は、女性の使用がほとんどみられなかったが、『浮世風呂』では「なさい」以外は女性の方が多く使っていた。「なさい」「なせえ」「なさいまし」が、命令表現といえそうなa、b、c、e、f、gグループの総数に占める比率は約27%で、洒落本とそれほど大きな違いはない。

「なさい」は男性のみで19例、「なせえ」は総使用数としては「なさい」の2.5倍以上で、女性話者の使用の方が多かった。現代語の感覚でいうと、「なさい」より「なせえ」の方が改まり度が低くて女性の使用が少なくなりそうだが、ここでは別の原理が働いてい

るようである。「なさい」の使用例について、話者と聞き手との関係まで考慮してみると、〈表5〉からはわからないが、聞き手より地位が上か、年齢が上の男性発話者に偏っているといえる^{註7}。もしかしたら「なさい」は「なせえ」に比べて強制力が強く感じられる行為要求表現だったのではないだろうか。そういう表現は女性より男性、とくに地位や年齢が上の男性話者の方が使いやすいといえるのであろう。「なさいまし」も女性の使用の方が多く見られたが、これは丁寧さがプラスされているからだと思われる。

4-2-2. 「～な」「～ねえ」による行為要求表現

「な」「ねえ」による行為要求表現は合わせて69例。「な」は男性話者と女性話者の使用数に大差ないが、「ねえ」の使用が男性に大きく偏っている点が特徴的である。3-3-2で述べたように、この「ねえ」は江戸語の特徴である接続母音の長母音化という変化によって生まれた形式だと考えられ、その点では4-2-1の「なせえ」とか4-2-3の「～っせえ」と同じである。しかし、おそらく「～な」という行為要求表現は「～なさい」や「～っしゃい」に比べて強制力が弱く感じられる形式だったので、「～なさい」「～っしゃい」と違って女性が「～な」を使いにくいということはなく、「～な」と「～ねえ」の違いは、他の接続母音形式と長母音形式の違い（ex「高い」と「高けえ」、「行かない」と「行かねえ」のような違い）と同様に、後者が非標準形式（より丁寧さや改まり度などが低い形式）だったと思われる。その点で男性話者による使用が多くなっているのだと考えておく。

4-2-3. 「～っしゃい系」による行為要求表現

「～っしゃい」とその長母音形式である「～っせえ」の関係は、用例が少なくて確かなことはわからないが、基本的には「～なさい」とその長母音形式である「～なせえ」の関係と平行なものと思われる。ただし、このグループには洒落本にはみられなかった「～っし」という形式も現れていて、こちらは典型的には、一般市民の中でも社会的地位があまり高くない、友人同士のような関係にある男性話者と聞き手の場合によく使われる行為要求表現形式のようである^{註8}。「～しゃいませ(まし)」「～っせえませ(まし)」という丁寧語を加えた形式は洒落本にも『浮世風呂』にもみられなかった。

4-2-4. 「ください系」による行為要求表現

洒落本には「～ください」「～くだせえ」「～くださいませ」の3種類のいわゆる依頼表現形式が現れたが、『浮世風呂』では「～くださりませ」が1例、「～くださいまし」が2例現れただけであった。使用者は俳諧師の鬼角（「くださりませ」）、女性では巳とおいか（「くださいまし」）で『浮世風呂』に登場する話者達の中では相対的に社会的地位が高い話者の発話に見られた。

4-2-5. 命令形による行為要求表現

本動詞および補助動詞の命令形や助動詞の命令形による行為要求表現は、合計74例現れた。a、b、c、e、f、gグループの総数に占める比率は約21.4%で、洒落本（約40%）

と比べると半分くらいになっている。

同じ命令形といっても、聞き手に対する丁寧さとか配慮という点で違いがあると思われる。「～ませ(まし)」「～やれ」「～給へ」「～候へ」という形は、74例中の11例で、これは女性話者の使用が多かった(8例)。それ以外の命令形による行為要求表現は、「洒落本」と同様で男性話者が多い。

4-2-6. 「～や」による行為要求表現

「動詞・補助動詞連用形+や」という形の行為要求表現は11例で、男性話者にも女性話者にも同じくらいの使用例があった。ただ、どちらも使用数があまり多くないので、洒落本では男性話者に傾いていたものが女性話者にも広がったといえるかのどうか、これだけでは判断できない。

4-2-7. 「お+動詞連用形」による行為要求表現

例えば「～をお食べ」とか「～を食べておくれ」というタイプの行為要求表現は女性話者を中心に70例現れた。同等か目下の聞き手に対して使用するものがほとんどであった。行為要求の専用形式とはいえないiグループを除けば、女性話者の行為要求表現のうちの30%以上がこのタイプの表現を使用していることになる。洒落本ではこのタイプは男性話者の3例しか現れておらず、洒落本と滑稽本とで最も大きく異なる部分といえる。

4-2-8. 「誘いかけ」による行為要求表現

「自分と一緒に～しよう」という行為要求表現は29例みられた。助動詞「う」を用いた誘いかけが大半で26例、そのほかに、「行くべい」など「～べい」という表現が3例だった。

4-2-9. その他の行為要求表現

行為要求を直接意味する言語形式によらない行為要求表現の中で、特に使用数が多かったのは「～がいい」という話者の評価を表すものが27例、疑問文によるものが15例、行為要求表現形式を顕現させずに聞き手に推測させるタイプが9例などであった。その他に、洒落本には見られないタ形やタリ形を用いたものが6例みられた。

5. 人情本にみられる行為要求表現

5-1. 『春色梅児誉美』『春色辰巳園』に現れた行為要求表現の概要

次の〈表3〉は、『春色梅児誉美』『春色辰巳園』に現れた行為要求表現の種類と数をまとめたものである。『春色梅児誉美』は「梅」、『春色辰巳の園』は「辰」の欄にそれぞれの出現数を示した。

『春色梅児誉美』には231例、『春色辰巳園』には191例の行為要求表現を確認できた。

「～なさい」だとか「～なさいまし」などの欄を見ると、『梅児誉美』と『辰巳園』の間にも使用形式の偏りがあるようにも思えるが、とりあえず本稿では、この2作品をまとめて扱うことにする。

〈表3〉『春色梅児誉美』『春色辰巳園』の行為要求表現（禁止以外）の出現数

	行為要求表現の種類	男性		女性		計		人情本計
		梅	辰	梅	辰	梅	辰	
a	～なさい	1	0	24	0	25	0	25
	～なせえ	10	0	4	4	14	4	18
	～なさいまし	2	0	24	2	26	2	28
	～なされまし	0	1	0	0	0	1	1
	～なせえまし	1	0	0	0	1	0	1
	～なはいまし	0	0	1	0	1	0	1
b	～な	27	5	17	50	44	55	99
	～ねえ	11	21	6	21	17	42	59
c	～っしゃいまし	0	0	1	0	0	1	1
	～っせえ	1	0	0	0	1	0	1
	～っし	3	1	0	0	3	1	4
d	～くだされ	0	0	0	1	0	1	1
	～くださいまし	1	1	8	4	9	5	14
e	動詞命令形	5	1	2	2	7	3	10
	補助動詞助動詞命令形	11	2	0	1	11	3	14
f	～や	3	0	0	0	3	0	3
g	お+動詞連用形	0	7	34	28	34	35	69
h	誘いかけ	3	4	2	8	5	12	17
i	～がいい	4	7	1	8	5	15	20
	～たい	1	0	0	0	1	0	1
	～たり・～た	2	1	1	0	3	1	4
	動詞「頼む」	1	0	1	0	2	0	2
	疑問文	3	3	3	0	6	3	9
	非顕現	3	2	9	6	12	8	20
	合計	93	56	138	135	231	191	422

5-2. 人情本の行為要求表現形式別の調査結果

5-2-1. 「～なさい系」による行為要求表現

「なさい系」の行為要求表現はあわせて74例で、丁寧の「ませ(まし)」がつかない「なさい」と「なせえ」が43、「なさいまし」が29、「なされまし」と「なせえまし」が各1例であった。『辰巳園』には「なさい系」が合わせて7例しか現れず、それ以外の67例はすべて『梅児誉美』の出現例である点特徴的だが、先にも述べたように、本稿ではこれ以上その点を追求することはしない。

「～なさい」と「～なせえ」の違いとしては、後者は男性も女性も使用しているのに対して、「～なさい」の方は、女性（25例中24例）に偏っている点が注目される。これは、「～なさい」に女性の使用例が見られなかった「洒落本」や『浮世風呂』とは大きく異なる点である。もうひとつ特徴的なのは（〈表3〉にはその点は表示していないが）、女性の24例中23例は、聞き手が目上であれ、同等とか目下であれ、「～なさい」の後に終助詞がついた形、つまり「～なさいよ」とか「～なさいな」という形で現れているという点である。終助詞の有無は、「なさい系」に限らず、今回はすべての行為要求表現に

ついて、それが終助詞のついた形で現れたものか、つかない形で現れたものかを区別して用例を採取してあるが、その結果からいうと、おおよその傾向として、終助詞を付与することによって、行為要求の露骨さとか押しつけがましさを緩和することを期待されているように思う。これは現代語で考えても、例えば「早くしろ」よりは「早くしろよ」の方が少しは軟らかい表現だといえるのと同じことであろう。男性に比べて女性の方がより露骨な行為要求を忌避する傾向があることは変わらないと仮定すると、「洒落本」や『浮世風呂』の女性話者は、より直接的で露骨な行為要求表現である「～なさい」を使わないことによって、『梅兎誉美』の女性話者は終助詞を付与することによって、その露骨さを回避しようとしているという解釈ができるかも知れない¹⁹。女性話者の使用する「～なせえ」の方は、本稿でこれまでも述べてきたように「～なさい」よりはもとも強制力が弱い印象があるためか、終助詞のつかない形の方が多く現れている。

助動詞の「まし」がついた形は、これもほとんどが女性話者の発話中に現れ、しかも女性話者の場合は「(お)本動詞+なさいまし」か「本動詞+て+(お)補助動詞+なさいまし」の形で現れる。「～なさいまし」は聞き手が目上の場合だけではなく、発話者と同等か目下の場合にも現れる（この点は『浮世風呂』も同じ）が、人情本ではさらに、聞き手が目上の場合の「～なさいまし」には終助詞を付けることが多いが、同等か目下の場合には終助詞を付けた例がないということも指摘できる。このように、行為要求表現と終助詞の有無の関係はそれだけでも興味深いのであるが、紙幅の制約もあり、本稿ではこれ以上終助詞の有無の問題を持ち込まない。

5-2-2. 「～な」「～ねえ」による行為要求表現

「～な」と「～ねえ」をあわせて158例で、人情本のなかでもっともよく使われる行為要求表現といえる。行為要求表現全体の約37%、a、b、c、e、f、gグループの総数に占める比率で考えると約47%にもものぼる。「な」「ねえ」ともに男性も女性も使用する。「な」は女性の使用が多く、「ねえ」はやや男性の使用が多いが、『浮世風呂』に比べて女性の使用例もかなり多い。

5-2-3. 「っしやい系」による行為要求表現

「っしやい系」の行為要求表現は、「～っせえ」1例、「～っし」4例、「～っしやいまし」1例で合計6例しか現れなかった。たった1例だが「いらっしやいまし」という「洒落本」にも『浮世風呂』にもみられなかった助動詞「まし」が付いた表現形式（女性話者による目上の相手に対する使用）があった。「まし」が付かない5例はすべて男性話者である。

5-2-4. 「ください系」による行為要求表現

「ください系」は、「～てくだされ」が1例、「～てくださいまし」が14例現れた。14例すべてが「くださいまし」の形で統一されていて、「なさい系」も丁寧の「ます」を付けた形が「なさいまし」にほぼ統一されていたのと似た傾向である。

5-2-5. 命令形による行為要求表現

動詞命令形の使用は全部で24例と、洒落本や『浮世風呂』に比べてかなり少なくなっている。使用者は洒落本や滑稽本と同様で男性話者が多い。補助動詞は「～ませ」「～やれ」「～てご覧じろ」などの丁寧さや配慮を表す補助動詞も、そうではない「～ておけ」「～てくれ」「～やがれ」などの補助動詞も男性話者の使用がほとんどで、女性話者は「～ませ」の1例だけであった。

5-2-6. 「～や」による行為要求表現

「～や」という行為要求表現は、男性話者ばかり3例であった。「洒落本」はもちろん、『浮世風呂』と比べてもこの表現形式の使用は非常に少ないといえる。

5-2-7. 「お+動詞連用形」による行為要求表現

「洒落本」ではあまりみられなかったこのタイプの行為要求表現が『浮世風呂』では、女性話者の使用が非常に多くなっていたが、人情本でも62例もみられ、女性の行為要求表現の中心的表現形式といえるであろう。

5-2-8. 「誘いかけ」による行為要求表現

このタイプの行為要求表現は、人情本でも、洒落本や『浮世風呂』と同じく、それほど多いとはいえないがある程度の安定した使用がみられる。目上に対する誘いかけが少なく9割以上が同等か目下の聞き手に対するものであるという点でも3つの資料ともに共通である。目上に対して「私と一緒に～しよう」と誘いかける行為は、たとえどんなに丁寧な言語形式を使おうと、たいていの状況では不適當な行為だと評価されるものであるという点では、現代語とあまり変わらなかったのかも知れない。

5-2-9. その他の行為要求表現

このグループの行為要求表現の中で、特に使用数が多かったのは「～がいい」という話者の評価を表すものと、行為要求表現形式を顕現させずに聞き手に推測させるタイプでともに20例、次が疑問文によるもので9例であった。その他に、洒落本には見られず、『浮世風呂』には現れたタ形やタリ形を用いたものは、人情本では4例みられた。

6. まとめ

6-1. 使用量、および使用者、相手などとの関係について

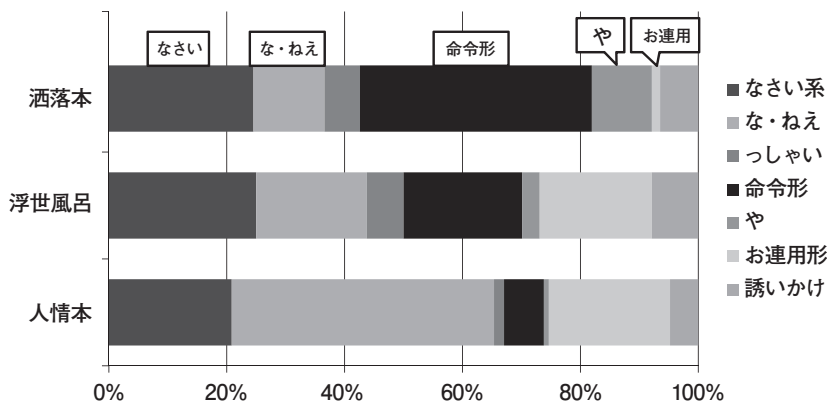
ここではまず、洒落本、滑稽本、人情本の相互の間の違いを考えず、これらの資料を全体として後期江戸語の一般庶民の言語使用を反映しているとみなしてみる。そうした場合、量的観点からいうと、行為要求表現のうち比較的強制力の強いいわゆる命令行為の中心をなしていた表現形式は「なさい系」、「命令形」、「な・ねえ」、「お+連用形」の諸形式だったといえよう。その中で一番強制力が強くて聞き手に選択の余地を与えようとしない、別の言い方をすれば聞き手に対する配慮が感じられにくい行為要求形式はお

そらく「本動詞命令形」によるものと、「～給へ」「～やれ」「～候へ」「～遊ばせ」などの尊敬語的補助動詞や丁寧の助動詞「ませ(まし)」以外の「補助動詞命令形」によるものだったと思われる。本稿で掲示した表からは読み取れないが、これらは目上に対する使用が全体でも1例しかなく、それ以外はすべて同等か目下の聞き手に対する使用ばかりである。「～なさい」で言い切る形の行為要求も、特に「なせえ」と比べた場合には強制力が強く感じられたようで目上に対する使用が「お+動詞+なさい」の形でさえ少なく、あったとしてもほとんどの用例が終助詞を加えたものとなっている。

使用者の性別との関係からいうと、「お+連用形」が女性の使用に大きく偏っていたことは確かなようである。「な・ねえ」のうちの「～ねえ」は洒落本と滑稽本では男性の使用が目立って多いが、人情本ではそのような傾向がみられない。先に述べた強制力が強く配慮が感じられにくい行為要求表現も全体として女性の使用が少ないことは確かだが、これは、そういう配慮の感じられない行為要求という言語行為を女性が回避しがちだということであり、例えば「お飲み」とか「飲んでおくれよ」などという表現が女性的だとか、「飲みねえ」という言い方が男性的だというのは別レベルの話だと思う。「～ください」に関しては次の6-2で言及する。

6-2. 行為要求表現形式の推移

松村(1998)をはじめとする多くの先行研究では、本稿で調査対象としたような時期の洒落本、『浮世風呂』、人情本の『春色梅児誉美』『春色辰巳園』について、洒落本が他の2種より早い時期の江戸語、人情本が他の2種より遅い時期の江戸語を反映していて、『浮世風呂』の言語はその中間と考えている。それに従って、3種の資料に現れた行為要求表現のうち、比較的よく使われていた表現形式の、それぞれの資料内での使用比率をグラフ化すると次のようになる。



〈グラフ〉主な行為要求表現形式の使用比率

このグラフによれば、「なさい系」はあまり変化なくかなりの比率をほぼ安定して維持していることがわかる。「誘いかけ」も時期の違いによる変動はそれほど目立たない。一方、「な・ねえ」と「お+連用形」による行為要求表現は洒落本→『浮世風呂』→人情本の順に使用比率が目立って大きくなっているし、逆に「命令形」と「～や」による行為要求表現は目立って小さくなっていることもわかる。「～や」に関しては、この言語形式が同じくらいの程度で配慮を感じさせる他の行為要求表現にとってかわられたといえるように思うが、「命令形」の方はそれとは違うであろう。聞き手への配慮をあまり感じさせない別の表現形式に取って代わられたというより、江戸の一般庶民の普通の言語使用状況下では、そのような配慮をあまり感じさせない行為要求を回避しようとする傾向がでてきたというべきではないだろうか。紙幅の制約の関係で本稿ではまったく言及できなかったが、本研究の筆者は、これら3種の資料と同様の調査を三遊亭円朝作『怪談牡丹燈籠』^{注10}の会話部分を対象として行った。この作品の登場人物は、洒落本、滑稽本、人情本などより上層階級のものも多く、落語の速記本ということもあって他の3種の資料と単純に比較することはできないであろう。ただ時代的には人情本よりずっと後の成立でありながら「命令形」による行為要求表現が量的には洒落本と同じくらい頻繁に現れてくる。これは「命令形」による行為要求表現が復活してきたというのではなく、この作品が、武士階級の発話者が自分の付き人、使用人などのような明確に身分が下と位置づけられる聞き手に対してあれこれと指示する場面が非常に多いことによるものと思われる。逆に言えばそういう状況ならば、命令形による行為要求表現は人情本の後の時代になっても、さらにいえば現代になっても廃れることなくいつでも使用可能な状態を維持しているということである。

一般に依頼表現といわれる「～ください系」は、洒落本11例、『浮世風呂』3例、人情本15例であった。「ませ(まし)」が付かない「～ください」「～くませえ」だけだと、洒落本5例、『浮世風呂』0、人情本1例で、どれも非常に少なかった。これに対して「～てくれ」という形での行為要求は3種の資料ともに数多く見られた。本稿の分類で言えばeの「命令形」の中の「て+補助動詞命令形」としての「～テクレ」の他に、bグループとしてカウントされた用例の中にも「～テ(お)クレな(ねえ)」があるし、gグループの用例の中にも「動詞+て+お+クレ」という形がかなり含まれている。現代語だと例えば「飲んでくれ」を、より聞き手に配慮した表現に変えると「飲んで下さい」になるが、この時代はまだ「～下さい」は少なく、「飲んでおくれ」とか「飲んでおくれな」という形が主流だったということである。

注

注1 用例の提示に際しては、当該の行為要求表現の発話者と聞き手を、その用例の出典の後に(発話者→聞き手)のような形で表示する。

注2 例えば「お行き」とか「飲んでおくれ」というのはこのグループであるが、「お行きな」とか「飲

んでおくれな」はbグループとしてカウントしてある。「な」がなくても行為要求表現なのでfの方針と食い違うが、「行きな」と「お行きな」、「飲んでくれな」と「飲んでおくれな」を同じグループとするための処置である。

- 注3 代表的な著作としては近藤（1993）参照
- 注4 ただし、eグループの補助動詞の中には依頼というべき「～てくれ（ろ）」が入っているし、他にも「～くんない（aグループ）」「～くんない（bグループ）」などもあるので、その点でこの数値は厳密なものではない。
- 注5 洒落本の場合、遊女の発話と男性客の発話が多く、ここのデータからはそのうちの遊女の発話を除いたので、必然的に男性客の遊女や遊女屋、茶屋などの従業員に向けての発話が多いことになる。
- 注6 森（2010）にも同趣旨の記述がある。
- 注7 「なさい」の発話者は隠居、医者、松エ門、古エ門、鬼角、福助など登場人物の中では年配だとか社会的な地位の高い人物がほとんどである。
- 注8 「～っし」に関しては、小島（1974）に使用者や使用場面についてのより詳細な記述がある。
- 注9 ただし、それだけでは『梅見誉美』や『辰巳園』の男性話者はなぜ「～なさい」を使用しないのかという点は説明できていないので問題は残る
- 注10 円朝の高座の若林珪蔵・酒井昇造による速記本、明治12年刊

使用したテキスト

洒落本…8本ともすべて『洒落本大成』（中央公論社）
『浮世風呂』…新日本古典文学大系86（岩波書店）
『春色梅見誉美』『春色辰巳園』…日本古典文学大系64（岩波書店）
『怪談牡丹燈籠』…岩波文庫

言及した文献

沖裕子（1995）「勸めの言語表現について」『日本語学』14-11
工藤真由美（1979）「依頼表現の歴史的発達」『国語と国文学』56-1
小島俊夫（1974）『後期江戸ことばの敬語体系』笠間書院
近藤豊勝（1993）『江戸遊女語論集』新典社
田中章夫（1957）「近代東京命令表現の通時的考察」『国語と国文学』34-5
姫野伴子（1991）「行為指示型発話行為の機能と形式」『埼玉大学紀要』33-1
松村明（1998）『増補 江戸語東京語の研究』東京堂出版
森勇太（2010）「行為指示表現の歴史的変遷-尊敬語と受益表現の相互関係の観点から」『日本語の研究』6-2

（本学教授）